

昭和15年2月1日（木）

朝晴天、午後より曇り。寒気緩む。終日局にてラジオかけざりし。電話書類整理終了。五時過ぎ退局。巖幼児に夕食を与ひつつあり。次いで、余負ふて外出三十分。六時夕食。昨日より炬燵に入れ、温むることとせり。従って外出せず。

昭和15年2月2日（金）

夜半より降雨。朝食巖、捲手（けんしゅ）にて幼児に遣る。余新聞を見、此の事あるを知らざりし。八時三十分よりバンド利用、負ふ。道（さす）がに幼児も緊足より免れ、負ふ者も楽なり。巖八時四十分出発。余は午前九時十五分まで負ふて出発。和傘借る。出発の際、降雨せしこと珍らし。

昭和15年2月3日（土）

昨永江氏老母、病氣悪しとのことにて午後より見舞ふ。山本三余校主来局。見習を更に頼む旨、口吻を洩らさる。余拒絶的態度に出づ。長洲局配達、柳ヶ浦某宛て速達不著、在裡小為替五円は当局にて、小祝、都留常政名義にて12, 23払渡しあり。右に関し刑事の来訪を求め、午後二人来局。三時より雪盛んに降る。併し積もる前、概ね消失。風呂沸き、夕食後七時三十分入浴。販宅の際、解決未済、事故余に提出。余多少焦燥を感じ、野口氏に小言を列ぶ。後、顧みて気の毒に不堪、御詫びせり。道子より葉書、北野文雄（行橋様??気付け）より鏡餅二枚送付越せりと。永江氏此日午前一時頃販宅せりと云ふ。以上は二日分附け洩らし。

朝一時晴れ、曇り後降雨。四時頃歇む。山本氏来局。

小野氏四時過ぎ飯宅。昨病氣見舞いたる永江氏に、母堂の経過を尋ぬ。意識明瞭なるも衰弱し居れりと。昨電話書類を、本日は電報原書を整理す。帰宅時降雨。永く局に保管の和傘を利用す。夜相当寒くなる。飯ると直ぐ幼児を負ふ。巖は既に飯宅し、洋服の儘、整理に没頭の模様。

昭和15年2月4日（日）

朝見れば雪降り積み、畔又は道路の両側に残存。旭光を受け綺麗なり。巖八時過ぎ出発。余、前の家の日当たり良き方に子守りす。暖かなり、今日節分。九時二十五分出局。野口氏は日曜なるも、小野氏不在とて、定刻出勤。午後より永江氏、老母かかり行きし如し。ペンキ屋暫く振りにて来局、働く。甘藷15、落花生15、野口氏に求めしむ。ペンキ屋にも馳走す。郵便下巻、電話篇、訂正書に依り夫々訂正。時刻珍しく昨日来動き居る、山本氏位置を正したるに因るか。和博悦子、咳甚だし。殆ど終日就床。昨日来、寝かし置く幼児も感染の恐れあり。此日五時ペンキ屋飯宅。夫れまで余退出し能わず。愈々飯り、余も退出せんとする際ベル鳴る。局報着、返信を要するものの由。良信係員に代わって返事を発送せしむ。炬燵に智子を入れ信子を抱き、暖を採る。晴天、寒し。

昭和15年2月5日（月）

立春、薄雲漲る。幼児負ふて外出。九時十分飯り出局。小野氏も出勤。ペンキ屋11、70請求、支払ふ。曇り、雨模様。飯宅、幼児負ふて外出。六時飯る。夕食餅頂く。九時二十分床展べ貰ふ。野口氏帰宅遅れ、此日も九時四十分頃となる。詢（まこと）に気の毒に不堪。降雨。

昭和15年2月6日（火）

夜半より降雨。朝出局時、猶不歇。浦田氏より速達にて余の出張を促し来る。葉書にて同様土曜日行く旨、通告せり。午後四時頃より歇む。幼児咳初む。外出三日分、夕食を与ひて後外出せず。此日朱肉液3, 50、肉池25を求めたり。

昭和15年2月7日（水）

曇り、時に晴れ。寒気急に加わる。山本氏臨局。昼食を摂り飯る。同氏の謂ふ処に依れば、耶鉄は女学校出身初任給65、半期増給、勤む時間八時間。小野には或る時期、70銭増給を要望すと。石田は日給1, 00、下宿料20円、半期5銭増額。智子信子発熱、智子気管肺炎を起こせる如く、呼吸の模様悪し。炬燵に入れ、安静にしておく。夜寒し、綿入れ取出し着用す。夜、巖風呂に行きたり。愛子、巖の無関心を訴ふ。

昭和15年2月8日（木）

晴れ、時に曇り。寒さ相当厳し。九時出発。幼児炬燵に安静の為、余裕あり。和博未だ咳収まらざるも起床、遊び居る。浦田氏より手紙ありしに對し、明日午後八時四十四分、佐世保着の旨回答せり。道子へも夕食を頂き、出発する旨通知す。此の夜、愛子より十円旅費として、余に渡す。他日頂く旨を述べて受取らざりし。愛子直接持参せしも、巖に旨を含めて辞退す。

昭和15年2月9日（金）

晴れ、時々曇り。仕事大体片付け、十一時二十分頃出

発。切符は朝出局の序でに購う、3, 22。此日新入営兵多数乗り込み、各駅共歓送に賑ふ。ブラスバンドで囃し立つる向き多し。汽車次第に遅る。三時三十分近く、予定より三十分遅れて到着。髯剃り、四時十分夕食に餅を頂き、四時四十五分出発。新聞を貰ふて、途中読むべく要求す。此の度は汽車混雑せず。八時五十分着。勝富町に下車、後戻りす。浦田氏不在、少時して飯らる。此の日神霊例祭、米倉様?先刻飯られたる由。浦田氏より事件の真相を聴取す。十二時過ぎまでかかる。一時頃就床。冷えて容易に眠られず。浦田氏、神酒の下りを飲まる。

昭和15年2月10日（土）

曇り。浦田氏八時、佐賀分某炭山に行かる。余和服にて市場を一巡す。午後一時少し前、浦田氏飯らる。余の為に特に早く飯られし如し。午後二時出発。鰯一斤18を、幾斤か貰ふて出発。山口より急行、午後六時十分到着。夕食を準備し貰ふ。皆に面倒かく。久子森永を辞退したる由。

昭和15年2月11日（日）

紀元二千六百年。正午頃より降雨。目覚まし時計、80修繕料とらる。鰯団子、余造る。油一合30銭に騰貴せりと云ふ。矢張り揚げて貰ふ。直方日高進氏逝去（六日）の報あり。十二日直方市古町圓徳寺にて葬儀の由。一月二十日、第133号人間道雑誌を未だ閲読せざる間に、幽冥処を異にす。詢（まこと）に哀悼に不堪。春雨萬々として夜に至る。

昭和15年2月12日（月）

曇り。薬院大通り2の55、福岡人間道場、松尾一氏より同様通知あり。市内に斯うした道場ありとは初めて知れり。久子午後友人と外出の際、記念消印を福岡局に求めしむ。婚約者藤岡氏の下に至りし如し。同氏より新刊書数冊借覧し居り。之を返戻しに行きたるらし。六時に販宅する由故、久子の販宅は七時頃となるべしと云う。余独り久子の販るを待たず、夕食を済ます。此の夜、甚だ気温暖かなり。暖房の要なき位なり。雨模様。甚だ寝苦し。

昭和15年2月13日（火）

曇り、時々降雨。異状の暖かさ。此の夜防空警報発令。電力節約に就きてと題し、警察部よりパンフレットを各戸に配布越せり。警報は七時過ぎ解除せらる。恰度ニュースの時刻なりし。演習に非ざる旨通告あり。夜暖かなり。蒲団一枚剥脱せり。此の夜熱を計るに、道子37、5、余36、5。道子風邪の模様にて、夜食進まざる如きを見、余も多少異状ある如く、矢張り感冒を自覚せし故、計量せしもの。格別のことなく安神せり。警報の原因は、台湾に国籍不明の飛行機六機通過せしが、後に之は僚機たるを知り、解除せし由。同時に天気予報も中止しありしが、放送を復活することとなれり。夕方より天候恢復の兆しあり。

昭和15年2月14日（水）

快晴。風稍冷なるも、春らしき面影を宿しあるを窺はる。手紙数通書く。野口氏より通信事務にて、十五日局長会を耶馬溪倶楽部にて開催。監察来月施行、対策研究会ある由。出席方通告越す。返事発送せずして、行かぬこ

ととす。

昭和15年2月15日（木）

曇り時々晴れ。手紙此日発送。記念日附印、捺印方申し込む。投函に出掛けたるに、従来焼き芋屋は古物店に変更あり。一寸覗きたるに、筆筒55円が眼につく。気温再び降下す。

昭和15年2月16日（金）

曇り。昼前、道、澄外出。四時近く飯る。此の間久子の友達来たり。少時炬燵にて遊び飯る。飯塚徳前に、野菜店を開き居る者なる由。道子反物岩田屋より求め来る。三十余円。従前二十円位の品なり。二郎より来翰。静江と共に医者に雇われ居ると云ふ。墓建設の件に触れあり。

昭和15年2月17日（土）

昨二郎の手紙中、大原澄江氏病氣危篤の由にて、静江氏見舞いに行きたけれども、自分等も病氣とて行き悩み居るとあり。然るに此の日、左の通知あり「二女スミエ儀臥床中の処、十五日病勢俄に昂（たかぶ）り、午後十二時永眠仕候、此の段御通知申上げ候。追って葬儀は十七日午後四時、市内桜町友未寺に於いて相営み申し候」。金三円、久子に簗島局にて小為替を組み発送したり。二郎にも返事を書き、記念日付印捺印方附記。猶局員三名にも葉書発送。午後七時、城西橋柳原先生の郷の集いに出席の為出発。樋口（大学医師）、森、高瀬、桑原、余の五名。十一時二十分閉会。飯宅せしは十二時を過ぎたり。十六日夜より市内商店九時まで、料理屋カフェー等は十一時閉店となる。四時頃より晴れ。夜は

快晴。聊（いささ）か冷ゆ。外套着用せず。

昭和15年2月18日（日）

朝の間多少曇り。次第に晴天となるも、風は幾分冷ゆ。下帯洗濯、半日にて乾く。夕食後理髪し貫ふ。久子の例の友達来たり、一緒に外出。五時過ぎ飯る。藤岡達夫氏を訪ひし如し。此日六時過ぎ電報。後藤寺二郎より「アスユクタノム」とあり。中津行きを見合わすこととし、此の旨、永江氏巖にも通知せり。向上一二月分、光誌同上全部読了。バケツ底部穴明き、修理す。

昭和15年2月19日（月）

曇り、雨模様。昨夜、玉猫ドブに落込み、真っ黒くなり来る。一晚家に入れざりし。夜通し啼きたりとあり。駒次へも葉書出す。二郎四時近く来る。静江氏も来る。余は静江氏病氣と聞き、二郎代理し来れるものとのみ思料し居たるに、予期に反せるに対し、稍平らならざるものあり。澄子等も好意を表さぬ嫌いありて、相互に兎角釈然たらざるものあり。二郎不満の態。夕食後、二郎夫婦タクシーにて秀夫を訪ふ。十時近く飯宅。余は下に寝て居る。夜降雨。

昭和15年2月20日（火）

朝巖に何か土産物を届くべきを慫慂。二郎、乃ち買い物に出掛け、カルケットを余の注文通り求め来る。余之を携え、八時四十分出発。降雨歇まず。久子にバス停留所まで送って貫ひ、洋傘を持たせ返す。汽車賃1, 51銭は余の行違え、1, 81正当。然るに全く当て嵌めて持参せしこととて、はたと当惑せり。飯るに帰られず、借るに人

なく、少時思案に暮れ居たり。此の時、久子に貰ひたる小蝦蟇口に幾らか残りあるを思出し、之を検するに33銭あり。汽車賃を払ふて3銭を剰す。三拝九拝す。此蝦蟇口には、先日柳原先生かかり行く際、電車賃として、外に予備として幾分余分に納入し置きたるもの。それが参拾銭ありとは予想せざりし。此の日本下主事より、後藤寺本田君見学に來たり、余を訪ねたき電話あり。四時過ぎ來る。二回に貯金八円程、即時払いす。乃ち同氏を伴い耶馬溪俱樂部に案内、定食注文す。4, 40かかる。帰れば山本氏來局。菓子数个頂く、悉く局員に頒与す。永江氏老婆を見舞ひ不在。本田氏より菓子折頂く。五時過ぎ飯り、夕食を摂らず。風呂沸く。雨、霧の如く降る。

昭和15年2月21日（水）

晴れ。出勤前、時寶堂を訪ぬるも本町に見当たらず。其の儘出局。原書差立て。栄町局長來局、待合室にて話し去る。保険赤子分加入契約、半年分十一円納付。昨本田氏より頂ける菓子、局員に頒配す。

昭和15年2月22日（木）

寒氣強し。朝時寶堂に行き、余の時計を頼む、2, 50と云う。ゼンマイ切断せる由。それにしても高騰に驚きぬ。曇り。午後三時過ぎ、資金受取りに中津局に行く。永江氏、栃木県に居る長女來たりし由にて、タクシーにて十時頃母堂かかり行き、四時を過ぎるも飯らず。五時三十九分頃、飯途に就く。巖、両児を一纏めに負ふて居る。餅頂く。塩川より待望の納豆、到着せる由。風強く、雪翻飜（へんぽん）たり。野口氏八時過ぎ飯る。後より聞きしに、現金不符合なりし由。一体に帰宅遅る、氣の毒

に堪えぬ。

昭和15年2月23日（金）

朝少時、幼児負ふこと常例の如し。貢氏より催促来たる。同氏の手紙は余の福岡在宅中発送、十九日中津に来たり。披見せしまで数日を閲（けみ）せしを以て、催促も無理からじ。何か余が憤りてでも居るかの如く推し、恐縮の態が認めらる。仍て返信認め、発送す。期日は二十四日としてやる。快晴。昨年十一月電信為替、哈爾賓振出し二百円を三百円と発行せし為、百円過払い事故発生に対し、竹折氏に話せしに、監視員を差し向くべしと謂わる。相談所の磯村氏臨局。写真帖を作るから、是非写真を一枚呉れと云ふ。外に相談所修繕の件に就き、相談あり。五時過ぎ飯宅。幼児に食事を摂らし、入浴せしむ。九時半再び入浴。

昭和15年2月24日（土）

快晴。寒さ強く、手洗い鉢氷結す。半時間余外出。日向は暖かし。巖五百円国債求め、放送局に保証金の代わりに送付。曩（さき）に貯金通帳にて（650現在高）差入れ置ける分を取戻す所存らし。例の血達磨氏、三時臨局。達磨の絵、一円にて賣付けらる。午前監視員来たり、今吉均氏に百円徴収を試む。不在にて空しく飯り来る。午後は余自から行くこととし、所在を質し同家を訪ぬ。同氏は目下哈爾賓に飯りし由。徴収方を転居先局に移すこととし処理せり。裁判所より繫属事件なしと回答越せり。岩上部長に尋ね、更に検事局に送付す。五時過ぎ飯れば、巖幼児に夕食を摂らし居る。後、小母車に入れ半時以上外出。此の間余夕食を済ます。野口氏夕食時帰る、珍し

い位。外出せず、炬燵に入れ八時まで遊ばす。

昭和15年2月25日（日）

午前三時半より降雨、黎明に及ぶ。気温頓（とみ）に温暖となる。余、朝新聞を見て居る間、幼児に朝飯勝手にて摂らす。九時まで和博を連れ、神社境内より還る。貝大漁、至る処貝計り。長靴穿き蜜柑二つ拾ふて、愛子に渡す。野口氏余より後にて出局。四時近く、30焼き薯、及び煎り餅求め振舞ふ。小野氏活動行きか、二時頃より不在。永江氏老母を見舞ひ、是れ亦不在。仍（よ）って二人にて食べ四時飯る。野口氏残りの菓子類持帰り、子供等に呉る。夜馬鈴薯を頂く。巖小母車にて半時間外出。

昭和15年2月26日（月）

午前二時三十分出火。眼覚め起床。西に偏す、安神して再び寝る。巖火事を知らず。余を泥棒と誤りしか推問す。東吉富局前、四五戸焼失せりと。朝幼児へ食事、巖摂らす。九時まで外出。快晴。午後五時飯る。巖守りし、飯呉る。次いで二十分間程外出したるも、余の飯が済まぬうち帰る。甘藷、黒豆頂く。此の日も風呂沸き、幼児を入れる。寝る前再び温まる。十時寝床。

昭和15年2月27日（火）

朝寒し。四十分間負ふて、九時過ぎ出発。巖既に出勤。朝吹氏来邸。栄町局長臨局。給料交付。快晴、日中暖かし。五時過ぎ帰る。夕食巖幼児に遣る。九時、二郎に出す手紙を余に示す。当地に来ぬのが頗る不満らし。余注意、諄々説く。

昭和15年2月28日（水）

天気予報の如く朝降雨、僅かにして歇む。幼児負ふて四十分間外出。九時頃朝吹氏来邸。出発時、雨全く歇む。寒気可なり厳し。永江氏午前中來客の為、出局せず。小倉氏（元交換手）より、修養団食前の祈りの言葉を、電話にて余に質す。富士紡に居る小倉龍彦氏と云ふから、姉弟関係と認めらる。余も忘れたる故、小坂氏に尋ねて返事せんと答え、往復葉書に書き居る際、復た電話あり。判明せりとのこと故、発送を見合わせたり。五時過ぎ眠る。夕食前外出。巖に呉れて貰ふ。此の夜巖より二郎対馨氏との関係を話す。余は之を遮（さえぎ）り、旧悪を云為（うんい）すべきに非らずとたしなむ。火を取りに來たりし愛子と、十一時過ぎまで話し寝る。曇り、寒し。

昭和15年2月29日（木）

曇り、巖早く出発。朝食幼児に余やる。更に負ふて外出。智子泣く、持て剩す。信子足袋片方遺失、二回搜索、遂に見当たらず。真新しき毛糸とて、甚だ惜しまれて責任を痛感す。昨日和博に帽子水筒、幼児に歩行器1, 50求めたるも、親心の発露として見らる。和博大満悦にて吹聴す。栄町局長来、上がらず去らる。午前十時三十分北野純一氏来局。突然なるも、此の朝東京にて差出しの葉書を見て驚き居たる際、態々（わざわざ）尋ねて來たりしを謝し、金参円を餞別として贈る。入営は三月四日と云ふ。午後五時過ぎ眠る。夕食後入浴。七時半頃より曇となり、後雪に變ず。十時頃一二寸積もる。九時過ぎ電燈消滅。余の電熱冷却の儘、十二時頃点火まで温まらず。野口氏眠宅、十時頃。